

観光資源としての知多四国 —愛知電鉄と参拝案内—

橋 敏 夫

要 旨：愛知県の東部にある知多半島には、江戸時代後期の文政7年（1824）に開場した知多四国八十八ヶ所霊場があり、徐々に巡拝者を増やした。明治期になり、同地域に愛知電気鉄道株式会社が路線を敷設した。愛知電鉄は、大正6年（1917）の神宮前－有松間の開通に際し、知多四国を観光資源として捉えて参拝案内を作成した。この経営戦略には、一定の効果があつた。

キーワード：知多半島 知多四国 弘栄講 愛知電鉄 観光資源

はじめに

知多四国は、愛知県西部の知多半島に点在する八十八か所の霊場を巡拝する。江戸時代後期の文化6年（1809）3月17日、弘法大師の夢告を受けた尾張国知多郡古見村（知多市）にある妙楽寺の住職亮山が、発願した。亮山自ら三度の四国遍路を重ね、岡戸半蔵・武田安兵衛という協力者を得、文政7年（1824）3月の成立にこぎつけた。亮山の四国遍路という経験から、その写し霊場として形を整えたのである。亮山と協力者2名は、「三開祖」として崇敬された⁽¹⁾。

この知多四国に関しては、明治期以降の盛況を明らかにした初山智美氏⁽²⁾、写し霊場としての知多四国における先達制度を紹介した松田雅子氏⁽³⁾、巡礼文化という視点から知多四国に迫った山口由等氏等の研究がある⁽⁴⁾。特に、初山氏の研究は詳細で、裨益すること多大である。

また、半田市立博物館特別展図録『知多四国八十八ヶ所』は⁽⁵⁾、関係資料を網羅し、

その充実振りは群を抜いている。一方、愛知県図書館は所蔵する嘉永3年（1850）2月刊行の「尾州知多郡新四国八拾八ヶ所案内記 附り弘栄講御休伯」をWeb上で公開し⁽⁶⁾、その内容を利用者に提供している。

こうしたなか、筆者は公益財団法人愛銀教育文化財団の研究助成を得て、「愛知縣知多郡新四国札所参拝案内」を入手した。その全体像は後述するが、史料の成立事情等については、直接的な手掛かりがない。ただ、初山氏が、昭和7年（1932）頃に愛知電気鉄道株式会社（以下、愛知電鉄と略記）が発行した「尾張知多半島新四国直伝弘法大師八十八ヶ所札所参拝案内附三河三弘法」を取り上げたことは、重要である。知多新四国と四国直伝弘法大師という2か所の八十八ヶ所霊場と三河三弘法を愛知電鉄の路線とともに載せ、参拝に愛知電鉄の利用を促した、とあるからである。さらに、第1番札所の曹源寺に最も近い愛知電鉄前後駅前の森下売店が、納経帳である「新四国八十八ヶ所巡拝記 全」の特約販売所に指定されていたことを加え、知多新

四国霊場の遍路が愛知電鉄を利用することが多かった⁽⁷⁾、とも指摘しているからである。

初山氏は直接には指摘していないが、八十八ヶ所の写し霊場である知多四国と愛知電鉄の間には、密接な関係が存在したことを予想させるのである。

愛知電鉄の設立初期における経営については、石井里江氏の研究があるが、知多四国との関係には踏み込んでいない⁽⁸⁾。愛知電鉄の後継会社である名古屋鉄道株式会社の社史も同様である⁽⁹⁾。

最近、大塚耕平氏は、知多四国と三河新四国を実際に踏破した著書のなかで、後者の札所が大正3年(1914)開業の三河鉄道の沿線に所在していることを指摘したうえで、当該期の写し霊場開創の動きは鉄道の沿線振興策と密接に関係する⁽¹⁰⁾、と述べている。知多四国の開創は江戸時代後期であるから、札所を私鉄の沿線に指定することはあり得ないが、既に存在する札所を鉄道の沿線振興策として利用するという側面があることは、十分に予想できる。

そこで小稿では、知多四国の札所について概略を述べたうえで、愛知電鉄について触れ、「愛知縣知多郡新四国札所参拝案内」を紹介することで、知多四国を愛知電鉄がどのように捉えていたかを明らかにする。

1 知多四国

知多四国の成立後、文政8年(1825)には早速「尾州知多郡八十八ヶ所并二三十三所観音道中記」が板行された⁽¹¹⁾。「道中記」とあるが、実際は霊場八十八か所の巡拝順路を記した内容であろう。その特徴は、西国三十三ヶ所観音巡りを一緒に紹介していることである。

巡拝者は少しずつ増加したようである。こうした状況下、弘栄講が組織され、嘉永3年(1850)2月に「尾州知多郡新四国八拾八ヶ

所案内記 附り弘栄講御休伯」が板行された⁽¹²⁾。

(表紙)

「尾州知多郡新四国
八拾八ヶ所案内記
附り 弘栄講御休伯」

(表紙裏)

「○印 御休所
■印 御定宿」

続く1丁表から第1番札所の紹介。すなわち、村名・寺院名、次の札所までの距離を中心とし、さらに札所の近隣に指定の休所・定宿がある場合は、それを明示している。さらに札所相互の地理関係から、札所の順番をはずれた巡拝についても「順道よし」「さかうち道のりちかし」と注意書がある。ここでは、第1～5番までを紹介し、全体は表1にまとめた。

- 一番 大ワキ ^(曹)相源寺
二はんの札所へ廿八丁
これハ第八十八番木の山よりうちつゝき順道よし
- 二番 北尾 極楽寺
次の札所へ八丁
- 三番 横根 普門寺
十六丁
- 桶狭間
■田中屋由左衛門
- 四番 大苻 延命寺
一り
○萬屋国助
■中野屋栗右衛門
- 五番 長草 地藏寺
廿二丁
是ハ八十六番かけ村よりうちつゝき順道よし
平嶋村
■西崎屋儀右衛門
(後略)

表 1 知多四国88か所一覧

番号	地名	寺院名	距離	休泊	備考
1	大ワキ	相源寺	28丁		
2	北尾	極楽寺	8丁		
3	横根	普門寺	16丁	■	
4	大苈	延命寺	1里	○■	
5	長草	地藏寺	22丁	■	
6	半月	常福寺	1里		
7	村木	極楽寺	15丁	○	
8	緒川	伝崇寺	10丁	○■■	
9	石浜	明德寺	12丁	○	
10	生路	観音寺	12丁		
11	ふしゑ	安徳寺	12丁	■	
12	有脇	福寿寺	20丁	■	
13	板山	安楽寺	4丁	■	
14	福住	興正寺	12丁		
15	坂部	洞雲寺	20丁		
16	角岡	平泉寺	5丁		
17	高おか	観音寺	25丁		
18	乙川	光照寺	12丁	○■○	
19	下半田	光照院	5丁	■	
20	上半田	龍台寺	20丁		
21	ナラハ	常楽寺	1里	■○■	
22	長尾	大日堂	5丁		
23	同	蓮光寺	13丁	■	
24	大足	徳正寺	15丁	○	
25	布貴	園龍寺	1里	○■■	
26	布土	十王堂		■●○○	発起人墓所アリ
27	北方	弥勒寺	25丁	○■●●○	
28	古布	誓海寺	12丁		
29	切山	永寿寺	25丁		
30	山田	正法寺	20丁		
31	大井	医王寺			
32	同	利生院			
33	同	宝乗院			
34	同	北室院			
35	同	性慶院	18丁	■●●	
36	片名	成願寺	18丁	■	
37	師サキ	遍照寺	海上1里	■●	
38	日間賀	大光院	海上1里		
39	しのじま	正法寺			
40	同	医徳院	海上1里	○■●●	
41	中須	浄心寺	20丁	■	
42	久村	西法寺	8丁	■	
43	コノ	天龍寺	8丁		
44	岩ヤ	岩窟寺	30丁	○■	大師奥の院アリ

(4)

観光資源としての知多四国 —愛知電鉄と参拝案内—

44	内海名切	大師庵	12丁	○	
45	内海東端	泉蔵院	4丁	■ ■	
46	同中ノ郷	如意輪寺	8丁	■	
47	同馬場	持宝院	25丁	○ ○	
48	小ノ浦	良參寺	8丁	? ■	?は無印
49	細目	吉祥寺	8丁	○ ■ ■ ?	?は無印
50	野間□□	大御堂寺			
51	同	大坊			
52	同	密蔵院			
53	同	安養院			
54	同	龍雲寺			
55	同	円明院			
56	同	慈雲院	18丁		
57	奥田	報恩寺	1里	■ ○ ■	
58	大谷	来応寺	2丁		
59	同	玉泉寺	18丁	■ ○	
60	荻屋	安楽寺	25丁		
61	阿野	高讚寺	11丁		
62	タルミ	洞雲寺	20丁	■	
63	常滑	大善院	8丁	■ ■ ■ ○	
64	瀬木	宝全庵	2丁		
65	同	相持院	1里半		
66	石瀬	中之坊	6丁		
67	小倉	三光院	8丁	○	
68	大野	宝蔵寺	6丁	■ ■ ○ ■	
69	大草	慈光寺	5丁		
70	同	地藏寺	15丁		
71	南福谷	大知院	1里		
72	岡田	慈雲寺	20丁	■	
73	佐布里	正法院			
74	同	密巖坊			
75	同	泉蔵坊			
76	同	実相坊			
77	同	浄連坊	18丁		
78	古見	福生寺	8丁		
79	同	妙楽寺	25丁	■ ○	
80	寺本	栖光院	5丁		
81	小沼	龍蔵庵	30丁	○ ■ ■ ○ ○ ■ ○ ■ ■	
82	木田	観福寺	10丁		
83	大里	弥勒寺	12丁		
84	棚嶋	玄猷寺	12丁		
85	清水	観音堂	12丁		
86	かけ	観音寺	1里		
87	大高	長寿寺	20丁	■ ■	
88	木の山	円通寺			

八事山へ二り十丁

註 出典は『尾州知多郡新四国八拾八ヶ所案内記 附り弘栄講 御休伯』(嘉永3年)。

表1のうち、無番となっているのは、「布土村十王堂」で、「此所ニ当八十八ヶ所発起人 墓所アリ」と記されている。表紙裏にあるように、「○」「■」によって区別されている「御休所」と「御定宿」については、その記載だけを紹介し、具体的な屋号と名前は省略した（一部は印だけで、空欄の場合がある）。

末尾部分では、弘栄講の利点を強調し、世話人を明示している。ここで明らかのように、「弘栄講」は巡拝者の参拝講ではなく、定宿講である。

一弘栄講仲間ノ儀ハ、新四国八十八ヶ所御順拜之御方様御休伯御(注)といねひニ仕候、付而ハ右ニ書記置候御定宿へ御入来被成下候

御方様ニハ、万事御不都合無之様取計ひ可申候、

一御休伯の場所におひて御わすれもの等遊され候せつハ、慥ニ御預り申べく、万一多客のせつハ、ふんしつ物等御座候へバ、其宿元より吟味したし、若一相(略)わかり申さずせつハ、世話人方へ御届下さるべく候、その趣意ニよりいかよふとも取計らひ可申上候、

右之通弘栄講仲間中かたく取締申□□置候間、いく久敷御入来之程偏に々々奉希上候、已上、

嘉永三年

庚戌二月

世話人

内海中之郷 (榎屋) ますや新右衛門

同断

同 東端 井戸屋新蔵

同断

藪むら (注) 井桁屋次郎吉

右

内海之住 二鶴斎

施筆

世話人はいずれも定宿として名前が出てい

る人物で、榎屋新右衛門は第46番如意輪寺、井戸屋新蔵は第45番泉蔵院、井桁屋治郎吉は第81番龍蔵庵の所に記されている。

霊場の開創当初は少なかった巡拝者を嘉永年間にはある程度集めていた⁽¹³⁾、と初山氏は推測している。その根拠は、講元が嘉永5年に刊行した新四国巡拝案内図と、尾張藩士の小田切春江が安政4年(1857)に刊行した『知多土産』であるが、紹介した弘栄講は嘉永3年に結成されているから、推測は当を得ているだろう。

『知多土産』は、地誌として分類される性格を有するが、小田切春江が「知多一郡弘法大師巡拝記」を刊行予定だったことが、近年の愛知県史の調査により判明した⁽¹⁴⁾。

知多一郡弘法大師巡拝記 彩色入上仕立当郡ハ大師の古跡所々にありて、いちじるき霊場もすくなからねバ、それらのちなミに思ひおこせるにや、近き頃何某なる修行者新四国と名づけ、大師の巡拝所を撰ひてより、年々歳々詣つる人数をしらず、是大師の御徳はいふもさらなり、彼人の功も又少からず、その後夫ニならひて本四国・准四国など名づけし札所も出来て、心なき山賤、もしほやく海人の子などがめぐれるにハ、それかれまきる、事も有としきけバ、夫らのためにとて、こたび寺々のさまを今のうつゝのうつし画に物し、縁起及び道すがらの名所までも、桜木に花さかせて、いさゝか人々のたよりにせんとおもひ立ぬるハ、千とせ園のあるし小田切の春江なり、

上記は刊行予告の引札であるが、「知多一郡弘法大師巡拝記」は発見されていない。何らかの事情で状況が変わり『知多土産』となったようで、同書の序は引札の内容をさらに敷衍している⁽¹⁵⁾。

尾張の国知多の郡ハ、海へ長く張出たる地にして、東西の浦々何れも海岸の村落多く、東ハ境川の下流海となりて三河に

むか、西ハ伊勢・志摩の両国に相対す、されば村毎絶景の地にして、旧たる寺社も少なからねば、四時遊人杖をひきてめくる者数をしらず、爰に往し年いかなる人の発起にやありけん、当郡の寺々に西国三十三観音の霊場をうつして巡拝所を撰ひたるが、はじめハ詣する人もなかりしかば、文政のはじめ頃にや、修行者志しを興し、彼新四国の札所二ならひ、弘法大師の巡拝八十八所を定め、新四国と号けしが、これも其砌ハ詣人少なく、ほるなき事におもハれしが、かの修行者世をさりて後、彼が志願むなしからで、近き頃ハ遠近をいはず、巡拝の人々四時ともたゆる事なく、殊さら花さく春の頃ハ道路にあふる、群参となりしも、娑婆示現し給へる大悲の誓ひはいふも更也、大師の御徳、掲焉きしるしにてや侍るらん、さればそれにならひ、本四国八十八ヶ所百鉢弘法、秩父坂東六十七ヶ所をはじめ、六地藏百鉢地藏西方四十八願所二十五霊場、薬師十二大願所など年々歳々に其人々の志願の札所をとりどりに定めしより、今ハ村々寺院ごとに札所ならねいとすくなし、然れども其人々の志願により詣ずる寺院も同じからねば、こたびそれらの人のために巡拝のあらましをしるす、(下略)

特に、「近き頃ハ遠近をいはず、巡拝の人々四時ともたゆる事なく、殊さら花さく春の頃ハ道路にあふる、群参」とある部分である。しかしこれ以降、幕末維新の政治的混乱期と重なり、続く明治前期の巡拝者に関する動向は不明である⁽¹⁶⁾。

2 愛知電気鉄道株式会社

明治19年(1886)3月1日、官営東海道線を敷設する資材を武豊港から熱田に運搬する路線が開通した。行きは武豊港からレール等

を収載するが、帰りは空車となる筈だったが、一般旅客を乗車させることになり、同日から実施された。途中の駅は、半田-亀崎-緒川-大高であった。明治21年には東海道線浜松-大府間が開通し、大府-武豊間は、支線となった。当初、半田線と呼ばれたが、明治42年に武豊線と命名された⁽¹⁷⁾。武豊線の開通は、知多半島、特にその東海岸側の交通事情に大きな変化をもたらす契機となった。

明治39年12月、知多電車軌道株式会社は起業計画書を作成した⁽¹⁸⁾。その目的は、官設熱田駅付近から呼続-笠寺-鳴海-大高と結び、同所で知多半島を横断して西海岸に出、上野-横須賀-大野-常滑と結び、同所から知多半島の東海岸に戻り、官設武豊線と接続する電気鉄道を敷設して、官設線と知多電車軌道線を併せ、名古屋を起点とする環状線を完成させようとするものであった。その理由は、知多半島は人口が集中し、木綿・晒・土管といった工業品や各種海産物に恵まれ、沿岸には海水浴場の候補地が多い。それにも拘わらず、官設鉄道が東海岸を走るだけで、地元民がさらなる交通期間の充実を渴望しているからである。電気鉄道の敷設が実現すれば、商工業の発展は加速化し、沿岸部が絶好の遊園地となることは間違いなく、今後の発展も見込まれる、とする確信を表明した。工事手順は、熱田-常滑間を第1期とし、順次施工を予定し、電気は火力発電を予定しているが、他の購買方法も見つかる予定である、と記されている。

知多電車軌道株式会社起業計画書
 本公司ノ目的ハ官設東海道鉄道熱田停車場附近ヲ起点トシ愛知郡呼続町、笠寺村、鳴海町ヲ経テ知多郡大高町ニ出デ同所ヨリ同郡上野村、横須賀町、大野町等知多郡西海岸ヲ廻リ常滑町ニ達スル二十一哩余ノ間及ビ同町ヨリ半島ノ南端ヲ迂廻シテ官設鉄道武豊線ニ連絡スバク電気鉄道ヲ敷設シ知多半島沿海岸ト名古屋市間ト

ノ交通運輸ノ便利ニ供セントスルニアル由来知多半島ノ地ハ稀ニ見ル人口稠密ナル所ニシテ木綿、晒、土管及び諸種ノ海産物等許多ノ特産品多ク沿岸亦海水浴場ノ地ニ乏シカラズ従テ人客ノ往来貨物ノ出入頻繁ナルニモ拘ハラズ東海岸一部ニ官設鉄道アルノ外陸上未ダ何等交通機関ノ設備ヲ有セズ多年地方人士ノ渴望スル所ニアレバ爰ニ本電気鉄道開通ノ暁ニハ頓ニ商工業ノ発達ヲ促進スベク沿海岸一帯亦好個ノ遊園地タルニ至ルベク交通往来ニ層一層ノ繁劇ヲ加フ可キヲ信ズ

工事ノ順序ハ熱田、常滑間ヲ第一期線トシ其余ハ適当ナル時期ニ於テ拡張施工スベク原動力ハ本設計ニ於テハ暫ク火力発電ノ設計トナシアルモ他ニ有利ナル動力購買ノ約束出来得可キ見込ナリ

本公司ハ電気鉄道ヲ以テ乗客貨物ノ運輸ヲ為スノ外沿道各町村ニ電灯并ニ電力ノ供給ヲ兼営スベキ予定ナルヲ以テ凡テ実施ノ暁ニハ相当利益ノ増収ヲ見ルナルベシ

○本公司ハ十一月二十四日附ヲ以テ市内乗入延長線トシテ名古屋市ノ外廓ヲ一廻スベク設計ヲナシ其筋へ出願シ置キタルニ付幸ヒ許可ヲ受クルニ至レバ更ニ資本ヲ増加シテ急速工事ヲ施工スベキ予定ナリ

さらに計画書では、電気鉄道の収入不足に備え、一般家庭への電力販売を兼営することも表明している。この電力販売は、家庭用の電灯に対するものである。

最後の部分では、名古屋市内への延長乗入線についても用意周到に計画していることも付加している。ただ、ここでの日付「十一月二十四日」は、明治42年である。この延長乗入線が許可されたのは、大正2年(1913)2月18日のことで、路線は熱田東町—東陽町であった⁽¹⁹⁾。

上記の起業計画書は内容に不備があり取り

下げられた。明治42年9月23日になり、熱田新宮坂—常滑町を軌道条例に基づく許可を申請した。折から明治政府は私設鉄道政策を転換し、明治43年4月に軽便鉄道法を公布した。これに応じた知多電車軌道株式会社は、同年8月3日に軽便鉄道としての許可申請に切り替え、免許を獲得した。そして同年11月21日に会社の設立総会を開催し、社名を愛知電気鉄道株式会社に変更した。

起業計画書に載せた第1期線熱田—常滑のうち、伝馬町から大野までの工事が完成し、明治45年2月18日に開通した。同日付の新聞「新愛知」には、「熱田大野間電車開通」の広告が掲載された⁽²⁰⁾。これによれば、賃金表による途中駅は、「伝馬・道徳・星崎・名和村・加屋・太田川・尾張横須賀・寺本・古見・日長・新舞子・大野町」で、「開通ヨリ向フ拾日間紀念ノ為メ全線五割引」であった。電車の運行は「午前六時ヨリ午後九時迄毎壱時間発車」を謳った。「佐布里梅林真盛り」の語句もあり、佐布里(知多市)にある梅林が丁度見頃であることを強調した。沿線の観光施設を周知し、利用促進を呼びかけた。

路線は、明治45年8月1日に伝馬町—秋葉前、翌大正2年3月29日に大野—常滑[途中駅は西ノ口・蒲池・多屋]、同年8月31日に秋葉前—神宮前と延長され、第1期線が完成した。その後、同年10月25日からは貨物営業も開始した。

3 「愛知縣知多郡新四国札所参拝案内」

大正6年(1917)5月8日、神宮前—有松裏の有松線が開通し、営業運転を開始した。途中駅は、井戸田・南井戸田・呼続・桜・笠寺・本星崎・鳴海である。同年5月11日、名古屋新聞は「有松絞と電車開通」と題する特集記事を載せた⁽²¹⁾。はじめに有松が絞産地として著名であるばかりでなく、戦国大名今

川義元戦死の古戦場に直近の場所であることを謳った後に、次のように記している

(前略) 茲に昨年来愛電工事中の有松線工を終え、去る八日より電車開通を見るに至る、多年の希望全く達し、交通機関完備せり、愛電は開通祝意を表する為、向二週間全線各区域間賃金半減をなし居れり、神宮前発車時間は午前五時五十五分にて、終電は午後九時五十五分、各三十分毎に発車する由、有松発も同じ(ルビ省略)

つまり、開通後2週間は運賃半額である。この特集では、有松町の位置、有松絞沿革、商工同業組合についても紹介している。記事中に紹介された2枚の写真のうち1枚は、有松絞商工業組合事務所である。有松の紹介に尽くしているのは、同町の有力者が有松線の建設費を負担したからであろう⁽²²⁾。

「愛知縣知多郡新四国札所参拝案内」(以下、「参拝案内」と略記)の特徴は⁽²³⁾、「愛知電鉄神宮前駅」が写真で示され、有松駅から知立駅を経て岡崎駅にいたる区間が「全(愛知電鉄)未成線」になっていることである。したがって、この史料の発行主体は愛知電鉄、時期は有松線の開通以降ということになる。しかし、有松裏～新知立仮駅の開業が大正12年4月、神宮前～東岡崎開業の開業が同年8月であるので、下限の決定は難しい。

しかし、常滑線に目を転じると、星崎駅が大正6年に柴田駅と改称し、道徳～柴田間に大江駅が開業したのが、大正6年5月10日である。駅名変更と新駅開業の告知をも兼ねたと判断すれば、有松線の開通から余り遠くない時期に「参拝案内」は発行されたと推測してよいだろう。



知多四国の順路については、鳴海駅から5町の距離にある第87番札所長寿寺からスタートし、第88番円通寺、第5番地藏寺を経て、第1番曹源寺からは番号通りに巡拝し、第65番相持院の参拝後は常滑駅から西ノ口駅まで常滑線を使い、その後は第66番中之坊から、その先第86番観音寺で廻り納めとして加家駅から常滑線を利用して神宮前駅に戻ることを推奨している。この理由は、2里の距離短縮と運賃割引である。

◇新四国札所参拝順路ノ事

名古屋方面よりは、熱田愛知電鉄神宮前駅より乗車、鳴海停留所で下車。大高八十七番を廻初めとして第八十八番。第五番を経。第壱番へ出て順次参拝、第六十五番参拝後常滑駅より西ノ口停留所まで乗車、第六十六番より順拝、第八十六番を廻納めとして、加家駅より神宮前駅迄乗車御帰りになれば、今迄より二里余も近くなります

此の順路で御参拝の方には乗車賃金割引の便があります

◇三河三弘法参拝の事

愛知電鉄知立線開通の節は三河三弘法(一里山、一ツ木、重原)参拝には最も便利であります

さらに、近く予定されている有松線の延伸を見越し、三河三弘法の天目山密蔵院・大仙山西福寺・弘法山遍照院について触れ、将来に約束される利便性を強調している。

凡例には、「海水浴場」のマークがあり、横須賀・古見・新舞子・大野・野間・小野浦・日間賀島・武豊・亀崎等に付いている。この

うち、新舞子の海水浴場は、愛知電鉄が大正2年に無料休憩所を設けて紹介した場所である⁽²⁴⁾。「汽船発着地」には、煙突から煙を吐く蒸気船、「和船発着地」には帆掛け船を浮かべている。汽船発着地の半田に関しては、大正6年2月に設立された参勢巡航株式会社が拠点とした三河国渥美郡牟呂（豊橋市）・福江港（田原市）のうち、後者と蒲郡・半田港を結ぶ汽船航路が存在した⁽²⁵⁾。海水浴・汽船とも明治期以降の新潮流である。

さて、愛知電鉄が推奨した巡拝ルートにしたがうと、神宮前駅で乗車、鳴海駅で降車して札所廻り、常滑駅で乗車して西ノ口駅で降車、再び札所廻りして加家駅で再乗車して神宮前駅までということになる。そこで、これら4駅について大正3～8年の乗車・降車の人数と乗客について、各年度の『愛知県統計

書』から示した⁽²⁶⁾。乗客の単位は「円」で示されているので、当該駅の利用者が支払った運賃であろう。

鳴海駅については、大正6年5月の開業で、「参拝案内」がその後に刊行されたであろうから、大正6年の数字は、年度途中からのものである。

常滑駅では、一度減少した乗客が大正6年以降は漸増に転じた。乗車数の方が多く、降車数との差の開きが徐々に大きくなったことがわかる。西ノ口駅では、大正6年以降、降車数が伸び、乗車数との差が2倍になった。その反面、乗客数は増えていない。加家駅では、乗客数が順調に増加し、乗車数が降車数を上回る傾向を示している、というところである。

表2 愛知電鉄の4か駅における乗降車数と乗客 [大正3～8年]

駅名		乗車 (人)	降車 (人)	乗客 (円)
鳴海 [大正6年 5月開業]	大正3年	—	—	
	4年	—	—	
	5年	—	—	
	6年	47,208	54,155	2,439
	7年	88,358	111,343	4,009
	8年	122,746	122,786	5,415
常滑 [大正2年 3月開業]	大正3年	63,538	62,799	10,143
	4年	48,849	43,735	8,700
	5年	52,784	57,135	9,519
	6年	63,981	59,881	14,272
	7年	67,540	62,024	16,168
	8年	85,989	78,345	21,058
西ノ口 [大正2年 3月開業]	大正3年	6,419	6,528	718
	4年	5,705	4,507	460
	5年	5,107	4,654	347
	6年	5,437	9,581	146
	7年	4,997	10,739	190
	8年	5,201	11,649	317
加家 [明治45年 2月開業]	大正3年	25,564	21,875	2,327
	4年	21,535	17,085	2,075
	5年	24,432	29,042	2,252
	6年	27,978	27,417	2,989
	7年	32,457	31,497	3,563
	8年	36,593	35,121	4,046

註 出典は各年度の『愛知県統計書』による。国会図書館デジタルコレクションにより閲覧した。

おわりに

以上、知多四国の概要を述べたうえで、その札所が所在する知多半島に路線を敷設した愛知電鉄につき、常滑線と有松線について触れた後に、「参拝案内」を紹介した。

江戸時代後期に成立した知多四国を愛知電鉄が観光資源として活用しようとしたことは、「参拝案内」の存在から明らかだろう。しかも「参拝案内」にある巡拝ルートは、表2で示したように、特に西ノ口駅における降車人数が乗車人数の2倍になったのである。このことから、愛知電鉄の経営戦略は、効果があったと判定してよいだろう。

『名古屋鉄道百年史』によれば、愛知電鉄の経営成績は、それまで対資産利益率が4%以下だったが、大正6～9年度には、収入・利益が順調に伸び、対資産利益率は6.5%を確保した。これを同書は、有松線の開業と社長交代との成果としている⁽²⁷⁾。

この指摘に、知多四国を観光資源として活用したことを加えることは可能であろう。

註

- (1) 知多四国の概要については、『知多新四国誌』（知多新四国霊場会、1978年）が手軽である。
- (2) 初山智美「近代における知多新四国巡礼の盛況」『知多半島の歴史と現在』第10号（日本福祉大学知多半島総合研究所、1999年）所収。
- (3) 松田雅子「本四国霊場に対する新四国霊場の模倣形態と実際—知多四国霊場をフィールドとして—」、名古屋大学人文科学研究会『名古屋大学人文科学研究』34（名古屋大学大学院文学研究科、2005年）所収。
- (4) 山口由等「知多半島の巡礼文化と知多四国霊場」『四国遍路と世界の巡礼』第4号（愛媛大学法文学部付属 四国遍路・世界の巡礼研究センター、2019年）所収。
- (5) 『特別展 知多四国八十八ヶ所』（半田市立博物館、1998年）。
- (6) 愛知県立図書館のホームページによる。
- (7) 前掲註（2）初山智美「近代における知多新四

国巡礼の盛況」163～164頁。

- (8) 石井里枝「愛知電気鉄道株式会社の設立と初期経営」『経営総合科学』（愛知大学総合科学研究所、2014年）第102号所収、同「明治期の愛知県における電気鉄道会社の成立」『愛知大学経営論集』（愛知大学経営学部、2015年）所収。
- (9) 『名古屋鉄道百年史』（名古屋鉄道株式会社、1994年）。
- (10) 大塚耕平『愛知四国霊場の旅』（中日新聞社、2020年）174頁。
- (11) 未見。表紙の写真が前掲註（5）『特別展 知多四国八十八ヶ所』16頁にある。武豊町歴史民俗資料館所蔵の「三井傳左衛門家文書目録」中巻に所蔵が確認できる。
- (12) 前掲註（6）と同じ。同一史料が、「武川久兵衛家文書目録」『岐阜県所在史料目録』第34集（岐阜県歴史資料館、1994年）54頁に見出せる。
- (13) 前掲註（2）初山智美「近代における知多新四国巡礼の盛況」147頁。
- (14) 小田切春江「知多一郡弘法大師巡拝記」『愛知県史』資料編17近世3尾東・知多（愛知県、2010年）356号。
- (15) 小田切春江『知多土産』、愛知県郷土資料刊行会復刻版（1978年）による。
- (16) 前掲註（2）初山智美「近代における知多新四国巡礼の盛況」147頁。
- (17) 『武豊町誌』本文編（武豊町、1984年）487～498頁。
- (18) 「知多電車軌道株式会社起業計画書」『愛知県史』資料編31近代8流通・金融・交通（愛知県、2013年）225号。
- (19) 「愛知電気鉄道延長線敷設免許の件」『新修名古屋市史』資料編近代2（名古屋市、2009年）100号。
- (20) 前掲註（9）『名古屋鉄道百年史』97頁所収の「熱田大野間電車開通広告」（新愛知 明治45年2月18日）による。
- (21) 前掲註（9）『名古屋鉄道百年史』100～101頁。
- (22) 前掲註（9）『名古屋鉄道百年史』101頁。
- (23) 著者蔵。
- (24) 『知多市誌』本文編（知多市役所、1981年）510～514頁。
- (25) 『渥美郡史』（愛知県渥美郡役所、1923年）993頁。
- (26) 『愛知県統計書』大正3～8年度。国会図書館デジタルコレクションにより閲覧。
- (27) 前掲註（9）『名古屋鉄道百年史』100～101頁。

〔付記〕小稿は、公益財団法人 愛銀教育文化財団
令和元年度（第30回）助成金「知多四国八十八ヶ
所巡りの歴史学的研究」による成果の一部である。

